

子どもたちの放課後とソーシャル・インクルージョンについての一考察

○ 大阪女子短期大学 氏名 三好 正彦 (007247)

キーワード3つ: 学童保育、ソーシャル・インクルージョン、障害のある子ども

1. 研究目的

本研究は多様化する児童放課後施策において、「学童保育事業」の今後の展望と可能性について考察したものとなる。

放課後子どもプランなどの放課後施策は、「学童保育事業」と肩を並べる形で広がりを見せている。各自治体によって差異はあるにせよ、「学童保育事業」との競合、または連携、一体化などの関係は課題になっている。そして放課後施策は保護者、地域のニーズによって、多様な選択が行えるようになったことも事実である。

その中で「学童保育事業」としても、これまで以上にその特性、独自性をアピールする必要が高まっている事態であるとも言える。全国学童保育連絡協議会においても、「学童保育事業」と放課後子どもプラン、全児童対策事業などとの違いを訴え続けている。

本研究においても同様に、多様化する放課後施策の中での「学童保育事業」の今後の在り方を考察した内容となる。特に本研究では、「障害のある子ども」「ソーシャル・インクルージョン」「地域」をキーワードして、議論を行いたい。

2. 研究の視点および方法

本研究の方法論として、『関与的観察とエピソード記述』（鯨岡 2005）を参考にフィールドで起きたエピソードを分析することにより、上記の研究目的を達成する手段として用いることにした。障害のある子どもを受け入れる学童保育所は様々なタイプが存在しており、その点に関する検証がまだ十分ではないことは前述したとおりである。筆者はタイプの異なる学童保育所にスタッフとして参加しながら、観察を行ってきた。さらに筆者がフィールドワーク終了後に作成したフィールドノートデータをデータとして用いることにする。フィールドノートは、『フィールドワークの技法』（佐藤郁哉 2002）を参考に事象を記述したものである。また、個別的、集団面接法による半構造化インタビューを行った記述も活用する。同時に、保育終了後のミーティングについての記録を用いた。これらのデータを基にエピソード記述として表し、分析を行うことにより、客観的な事象としての分析に加えて、その場にいる人々の考えや相互作用を考慮することで、より現実的な対象として学童保育所で起きている現象を捉えることを目指す。

3. 倫理的配慮

本研究における参与観察による記録は、現場の指導員の下承を得た上で行っている。また、エピソードで登場する人物に関しては、プライバシーの観点から、イニシャルでの表記としている。

4. 研究結果

「学童保育」はこれまで、困難を抱える子ども・家庭と地域とのネット・ワークを繋ぐ場として機能してきたことは言うまでもない。大きく三つのタイプがあり、それぞれ違った特徴を有してはいるが、この点については共通したものでしょう。障害のある子どもについても、近年在籍児童も増加してきているが、そのような機能は以前より存在してきたと考えられる。もちろん、環境整備も含めまだまだ課題は多い。しかし、上記の実践は、「地域の繋がりを構築する連携の場」として機能する一端を示すものである。

これらの実践は「学童保育」の持つ「異年齢」「差異の受容」という性質を生かしたものである。このように「選別せず」に子どもたちの関係を育み場として「学童保育」を考えた場合、「社会的排除」問題と関係付けてどのようなことが言えるだろうか。

まず、前述したような学校を中心に「住み分け」が進み、地域との関係の希薄化に抗する関係構築の場としての「学童保育」を考えるという視点である。この視点には現状のような「障害のある子どもたち」への教育が起こしている地域との分断という事態への即時的な対応が可能であることが指摘できる。地域との人間関係が希薄になってしまっている、また全く関係を作ることができていない子どもたちが地域の学童保育所へ通うことによって、その機会を得ることができる。しかし、「インクルーシブ社会」の実現を目指すということから考えれば、「居場所を確保しただけ」という見方もでき、その場しのぎという感は否めない。現在のところ、環境整備の不十分さ故に、このような「居場所」としての機能を果たすだけになってしまっている学童保育所が少なくない。

5. 考察

そこで本当の意味での「社会的居場所」となるための次の段階として考えなければならない点として、「学童保育」の中味の取り組みである。「インクルーシブ実践」としてモデルとなるような取り組みができれば、家庭、学校にその影響を及ぼすことになる。つまり、「学童保育」におけるインクルーシブな取り組みは、学校に、地域に影響を及ぼすというフィードバック効果を生み出すことにもなる。そして将来的に「社会的排除」されるリスクを高く負っている「障害のある子ども」たちの「中心部」へのアクセスを継続して行うことにより、「地域の繋がりを構築する連携の場」としてセンター的な機能を果たす役割を担う可能性が期待できるのではないだろうか。